

## 第一部 東京

## プロローグ

朝。

僕は走っている。地面を叩くスニーカーから固い感触が背骨をつきぬける。息が白い。

全周約一キロの小さな公園を十周するのだ。都会の真ん中にある小公園の午前六時。

人影はまったくくない。露に湿った芝生の枯れた色に、白く塗られたベンチが浮いている。

走っている間は何も考えない。右足を出し、次に左足を出す。ゴールまで、あと二百メートルばかり。

肺があえぎ、今立ち止まれば、全身に震えがくることがわかっている。苦しい。

だが走る。

走り終えた。

芝生に跪き、すわった。汗がこめかみから首すじに流れ、それを首にまいていたタオルでぬ

ぐった。

今まで自分が走ってきた方角には、太陽が昇りつつある。黄金の色だ。

目が痛い。

公園は、僕のアパートから車で十分ばかりのところにある。毎朝、五時半に起きると、スウエットに着替えやってくる。仕事で徹夜した時以外は、この一カ月つづけている。

早起きを始めた日から、体重が三キログラム減った。自分の動きが軽くなっているのを感じる。

汗がとまり、鼻だけで呼吸できるようになると、立ち上がって車の方に歩いた。

まだ公園にはひとけがない。汗が冷えて、わずかに寒けがした。

早朝ランニングを始めたのに理由はない。ある晩、漠然と、しようと思いたち、翌朝から走りだした。

それで一カ月。悪くはない。

もし、計画をたてたとすれば、一週間ともたなかつただろう。

一台だけ、路上に置かれた車の窓はすっかり曇っていた。暖かな車内に、一刻も早く入り、すわりたかった。そこで、僕は助手席のドアを開けた。

それで、命拾いをした。

最初に目に入ったのは、運転席のドアの内側に結びつけられた、細い針金だった。針金は、シートにのった、ブリキ缶からのびていた。丸い、金色のクッキイの缶だ。

僕には一瞬で、それが何だかわかった。その朝、僕はついていたし、冴えてもいた。その朝でなければ気づかなかったかもしれない。あるいは、他の日であれば、無造作に缶を手もとにひきよせたかもしれない。いや、その前に、運転席のドアを開けていたろう。

とまっていた汗が再び流れだした。今までのとはちがう、吹き出した時点で、冷たさを感じさせる汗だ。

耳をすませた。時計のセコンドは聞こえない。僕は息をとめていた。

車から降りて、公衆電話を捜した。そつと、そつと、助手席のドアを閉めた。自分が走ってきた公園の、半周向こうに、電話ボックスがあったのを思い出した。

もう一度走った。

さつきまでほど、走ることに苦しさを感じなかった。

## 1

「過激派が地下出版したシリーズの中に製造法がのってますな。今はもう、発売中止になった除草剤を使うんです」

鑑識のおっさんが、僕の手から取り外したクッキイの缶を見下ろしていった。

「比較的、丁寧ていねいに作ってあるね。不発はないのじゃないかな」

「じゃあ、運転席のドアを開けていたら……」

警視庁の一課からきたという刑事が、訊きねた。

「そうね、車の前部は吹っ飛ばし、悪くすりゃ即死だね」

僕はパトカーの座席にすわって、彼らの会話を聞いていた。刑事が白手袋をはずして、顎あごをかいた。ヒゲがのびている。

「公安かな？」

手帳をつけていた同僚に話しかけた。問われた方が低い声で答えた。

「一応、連絡は……。あとがうるせえから……」

「で、職業、なんだって……」

僕の方を見やっていった。

「法律事務所に勤めてるって……。いや、弁護士じゃない。ほら、せんの刑事課長だった、徳山さんがいる、早川。あそこらしい」

「……失踪人調査……」

とぎれとぎれの会話が聞こえた。

二人の刑事は、スーツを着け、上から厚地のジャンパーを着こんでいる。鑑識のおっさんは紺の制服に、ジャンパーだ。

「で、過激派の線は……」

パトカーの運転席にすわる警官が、シヨート・ホープを一本くれた。マッチを借りて火をつけ、吸っていると他の刑事がやってきていった。

「今、お宅に送りますよ。四谷でしたね」

「そうです」

「いずれ、事情は……」

「まあ、ドカンとこなくて何よりだったね。本当に運がよかった……」

もう一人の刑事が僕の隣に乗りこんで、いった。

「ドカン」といいながら、ボタンとドアを閉める。

「指紋どれそうですか」

僕は訊ねた。

「さあ、どうかね。今時、指紋残す奴あいないから」

「でも爆弾だからね。作るときは細かい作業だし、それに吹っ飛ぶと思ってるやあ、案外残してるかもしれないね。ほら、札幌の、例の件するとき、とれたっていうじゃない……」

助手席に乗りこんだ刑事がふりかえっていった。

運転の警官が、無線連絡を終え、パトカーを発進させた。

「しっかし、えらい目だな。爆弾とは、え？」

刑事が僕にいった。

「命を狙われるほど、大物になったつもりはありませんがね」

「さあねえ、失踪人調査やってるつたけど、商売柄、どう？ お礼参りなんか」

「刑事さんほどじゃないでしょう」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。